

ぼくらのジャングル街

タウンゼンド 作

亀山龍樹 訳



933 Townsend, John Rowe
(NDC)

ぼくらのジャングル街

タウンゼント作 亀山龍樹訳

学習研究社

219P 図 19cm

(学研ベストブックス)

検印廃止

学研ベストブックス

ぼくらのジャングル街

訳 者・亀山龍樹

発行人・渡部ひろし

編集人・石井和夫

印刷所・信毎書籍印刷株式会社

・株式会社金羊社

発行所・株式会社学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5 〒145

振替 東京8-142930

©1976

5101

この本についてのお問い合わせは、下記あてをお願いします。

文書は、東京都大田区上池台4-40-5 (〒145)

学研ユーザー・サービス部「児童図書係」

電話は、東京(03)720-1111(大代表)

ぼくらのジャングル街

タウンゼンド作

亀山龍樹 訳
ディック＝ハート 画



学研ベストブックス

GUMBIE'S YARD

by John Rowe Townsend

Original English Edition published

by Hutchinson in London

1961

Japanese translation rights arranged

through K.Yano Literary Agency

訳者紹介

1922年、佐賀市生まれ。東京大学印哲科を卒業。英米の児童文学の翻訳ならびに創作に従事。おもな著書に『ぞうのなみだ』『宇宙海賊パプ船長』『空飛ぶドクター』など。訳書に『名犬ラッシー』『ぼくらがまもった金塊』『ルシンダの日記帳』『別れの歌』『ハリス夫人パリへ行く』『宝島』など多数ある。

装丁

中地 智

アリサ、ニコラスとペンロープにささげる

— J・R・タウンゼンド —

セント・ジュード教会

ツバキが丘

ウチカシ水道

ランのしげみ通り

ムクゲ通り

ジャングル街

ミモザ並み木の通り

倉庫

運河通り

原っぱ

おやしき

北西連絡運河

鉄道

鉄橋

コブチェスター市のジャングル街一帯



暑くもなく、いくらかかすんだ日ざしの、気持ちのいい春の日。ぼくは、妹のサンドラ、友だちのディックといっしょに、ジャングル街を歩いていた。

ジャングルといっても、ほんとうのジャングルじゃない。コブチェスター市のウイガン本道から、ちょっとはいった一画のことだ。このかいわいの道路には、みんな熱帯の花の名がついている——たとえば、ぼくたちが住んでいるところは、ランのしげみ通りといったぐあい。それで、ぼくらは、ジャングルと呼んでいる。

そんな名だから、いかにもはなやかで、にぎやかそうだが、じつのところ、ジャングル街には、はなやかさなんてものは、これっぽちもない。うすぎたない、古ぼけた場所ばしょで、もうすこししたら、市役所しやくしよのほうで、とりこわすことになっている——ひとりでにこわれっちまわなかったら、の話だけだ。

だが、ぼくらが昼食ちゆうしょくを食べようと、うちへ歩いてきた、このはればれとした土曜日の朝は、ジャングル街がいまでが、心たのしい場所ばしょに見えたのだ。

夏はもう、そこまでやってきていた。草は敷石しきいしのあいだからのびていたし、雑草ざっそうは、すぐにもあき地にはびこることだろう。日ざしも、日ましにながくなってきていた。たぶん、来週らいしゅうには、放課後ほうかごにクリケット（古くからイギリスでおこなわれている野球に似たゲームで、国技になっている）のゲームもできるようになるだろう。

ぼくが、とてもなかよくなっている犬も、ミモザ並み木の通りとおにいることだし、ぼくは、いとこのハロルドに、せっけんのからの木箱きばこで、車をこしらえてやるつもりだった。人生じんせいには、やりたい、おもしろいことが、いっぱいあるものだな。

ぼくらは、サンドラをまんなかに、三人ならんで歩いた。ランのしげみ通りどおへまがったとき、ぼくはうきうきして、ふいに歌をうたいだした。

「聞いてよ！ いい気なもんだわ。」と、サンドラがいった。

「へたくそケビン！　むりしてやがら。」　心にもない同情^{どうじよう}づらをつくって、ディックがいった。

「どこがいたむのかい、ケビン？」

「おまえを、あつというまに、いたくしてやらあ！」と、ぼく。

「へえ？　おまえと、だれとで？」

「おれさまを、なめてんのか？」

「そうとも、おれさまは、なめてるんさ。」

「ようし、わからせてやらあ。」

そこで、ぼくらは、しょっちゅうやっている、うそっこのとつくみあいをはじめた。

ぼくは、ディックととつくみあいをやっても、たいてい、ぎゅうのめにあわされた。ディックは十四で、ぼくより一つ年上^{としうえ}だし、からだだって、ひとまわり大きい。

ディックは、いきのいい、赤毛^{あかげ}つ子で、見た目にもなかなかいいやつだが、ただ一つ気に入らないのは、親分風^{おやぶんかぜ}をふかせることだ。やつは、生まれつきのリーダーで（それは、そうかもしれないが）、じぶんがいとも正しいと思ひこんでいる（こいつはそうじゃない）。

だから、ぼくが手も足も出せないことは、百もしょうちといわんばかりに、ぼくをあしらっているのだ。

「やめてよ、ふたりとも！」

ちびで、やせつぼのサンドラが、かんをたてた、だんぜんゆるさぬという顔つきで、わってはいった。

「けんかするんなら、あたしのいないふたりっきりのときにやってよ。ケビン、あんた、なんで、つかかるのよ？　たいてい、あんたがわるいんだわ。」

サンドラは、いつでもぼくをきめつける——ぼくはサンドラのあにきだし、ディックのほうは、まちがったことなんかやりっこない、と彼女はきめこんでいるんだ。

「サンドラ、ちょい待ちだ。」と、ディックがいった。「やつの脳みそをつぶしちゃうからな。あつ、そうそう、うっかりしてた。こいつは脳みそなんか、なにも……」

「おお、やめて！」

サンドラがくりかえして、それから、なにかをちらっと見て、つけくわえた。

「ね、ちょっと。あそこ、なんだかへんよ！」

ディックとぼくは、格闘をやめて、サンドラがゆびさすほうを見た。

通りのむこうがわの、ぼくらの家から、おとながふたり出てきた。とっておきの服を着て、ネッカチーフをかぶったドリスが、さきに、さっさと、すましこんで歩いていった。そのうし

ろから、さんざんつかった、ぼろのスーツケースをさげたウォルターが、あたふたドリスについていった。

ウォルターは、ぼくらのおじさんだ。ぼくたちの両親が死んだあと、サンドラとぼくは、ウォルターと、それから、おじさんの子どものハロルドとジーンと、いっしょに住むようになった。

ウォルターのおかみさんは、ウォルターをおいて出ていってしまっていた。サンドラは、おさないふたりの母親がわりにならなければならなかった。妹には、荷がおもかった。まだ十二だもの。

ウォルターの女友だちのドリスが、ぼくらといっしょに住むようになったので、家のなかのことも、ぐあいがよくなりそうだったが、長くはつづかなかった。ドリスは金髪で、まるっこく、ひらべったい顔で、でっかいからだだった。のべつ、家のなかを、スリッパの音をボタンボタンひびかせて歩いて、くわえタバコで、不平ばかりこぼして、そのくせ、じぶんはなにもしなかった。

ドリスは、ぼくら子どもたちがきらいだった。そして、ウォルターにあたりちらした。ふたりは、三日にいったんはけんかをしないと気がすまず、そのたんびに、ドリスはきまって、出

ていくとおどした。

「わたしや、いっちまうよ。もう、いつときだって、いてやるもんか。」

「ねがつたりだ。とつとと出てうせろ。せいせいすらあ。」

これが、ウォルターのきまり文句もんぐだった。ウォルターは、ドリスがとつと出ていかないことは、しょうちのうえだった。ドリスは、どこにもいくあてがないからだ。

「それしか、いいようを知らないんだね、ウォルター＝トンプソン。」ドリスはいいかえしてから、ぐちる。「あんたと、がきとで、わたしや頭にきちまうよ。」

けれど、そのうち、けんかは、あとかたなく消えてしまう。夕暮ゆうぐれになると、ふたりはなにともなかったかのように、けろりとして、となりの通りとおのかどの、一杯飲いっぱいのみ屋やのジョージの店みせに、おみこしをすえる。

サンドラは、ハロルドとジーンを寝かしねつける。ぼくら兄弟きょうだいはおきていて、ウォルターとドリスがもどってくるまで、じぶんのやりたいことをやりながら、待っているのが、きまりだった。

ところが、いま、この土曜日の昼ひなか、ふたりは、なんともふだんとちがったようすで、ランのしげみどお通りを、いそいで歩いていく。ドリスは、前を見つめ、わき目もふらず、大また



だ。

ウォルターが、追いついて、なにかいおうとしたが、ドリスは聞こえないふりをした。ふたりとも、ぼくらには気がつかない。

ぼくは、とまどった。

「おじさんたち、どうしたんだろ？ あんなふうにあわてて出ていくなんて、はじめてだよ。それも、おひるだったのにさ。」

サンドラも、びっくりしていた。通りをつきつて走って行って、ドリスの腕をつかんだ。

「おひるを、どうするの？」

ドリスは、サンドラをふりはらって、じゃけんにいった。

「わかってるよ！」

「あたしたち、なにを食べるの？」

「なんとかおし。できるだろ？」

「いつかえってくるの？」と、サンドラはきいた。

ウォルターが、追いついてきて、横あいからいった。

「つべこべきくんじゃねえたら！」ぴしゃりと、きめつけた。「さあ、じゃまだ！」

そしてふたりは——ドリスはつんつんして歩き、ウォルターは、しきりになにかいきかせようとしながら、大いそぎで横にくつついて——ランのしげみ通りどおりをまがると、ムクゲ通りのほうへいつてしまった。

ふたりがかどをまがって、見えなくなると、頭が三つ四つ、家々からにゅつとつき出て、わかったような、わからないような顔で、うなずきあった。

ぼくは、肩かたをすくめた。

「近所きんじよの人たちに、あんなところを見せないで、じぶんたちだけのとき、こっそりやりあったらいいのにな。」

けれど、サンドラは、まだ心配しんぱいそうな顔つきをしていた。

「ただごとじゃないわ。この二、三日、なにか、ほんとのごたごたがおきそうなおいがしてたの。それで、気がかりなのよ。」

「くよくよするな。気らくにいけよ。」と、ディックがいった。「あの人たちは、ちょっとかわっているだけさ。ふたりがいないあいだ、きみたち、のんびりしたらいいや。」

「あたしだって、たいしたことじゃないと思いたいんだけど。」と、サンドラはいった。

「で、ふたりはきみたちを、おきざりにしたりはしないだろう?」

「どうかしら。わからないわ……。とにかく、いきましょうよ、ケビン。なにか食べる用意よういでもしたほうがましだわ。」

「ぼくも、うちにかえったほうがいいな。」と、ディック。かれの家は、ムクゲどお通りの、ちょうどむこうがわの、とっつきにある。「心配しんぱいするなよ。あの人たちは、使つかいでのない銅貨どうかみたいに、おそろいでどこかから、ひょっこりもどってくるさ。じゃ、あばよ。」

ディックは、口笛くちふえをふいていってしまった。

ぼくたちは家にもどった。ハロルドとジーンのちびどもは、どこからかえってきていて、キッチンで、くだらない言いあいをやっていた。

「サンドラ、パンをちょうだいよう！」

ジーンがせがんだ。そして、スカートをくるくるまわしながら、ぼくらのまわりをとびはねた。ずんぐりむっくりで、まるっこい顔の、なまいきなちび。六歳さいだ。

「パン、パン、赤いジャムのパン！」

ジーンは、ふしをつけていった。ぼくは、げんこでこつんをころみたが、あたらなかった。ハロルドは、いすのなかにうつむいて、すわりこんでむっつりしていた。八歳さいで、とうさんのウォルターにそっくりだ。小がらの、やせっぽちで、ほそい金髪きんぱつに青い目をしていた。

ハロルドは、じぶんのないしょの夢の世界に、ひとりこんでいるようだった。だが、すぐに立って、食器戸しよつぎとだなのところへいった。大きなパンのかたまりを出して、まるで、このさわぎに永久えいきわにけりをつけてしまおうとでもいうふうに、サンドラとジーンのあいだのテーブルの上においた。

サンドラは、パンナイフを出すと、ぶあつく切ったジャムつきパンを、ふたりにそれぞれあてがって、てっとりばやく、そとへ追いだした。それから、やかんをかけながら、ぼくをふりかえった。

「おじさんたちは、きつとにげちゃったんだわ！ にげちゃったんだわよ！」

サンドラは、ひどくはらをたてていった。

「ぼくは、ウォルターおじさんが、ぼくらをおきざりにするなんて思わないなあ。だってさ、ドリスおばさんは、ほんとうのところ、まったく、なにひとつできやしないんだもの。おまえが知っているとおりさ。口ばかりだよ。あれもこれもって、計画けいかくするだけで、なにひとつできたためしはないんだ。ぼくは、ふたりがなにをやらうとしてるのか知らないけれど、今夜こんやもいつものように、ジョージの店みせにあらわれるよ。」

ぼくは、もっともらしくいったものの、自信じしんなんか、まったくなかった。